



世捨て人



神崎 ゆうや

そこは、随分と寂れた住宅街の一角だった。時間が時間なので当然と言いたいところだが、どの家にも明かりらしい明かりが殆どついていない事が、彼にそう結論付けさせる理由になっていた。

なまじ、昨日……否、既に日を跨いでの今日は、世間一般では休日とされている日曜日である。夜更かししない人間がいない訳がない。まったくのゼロ、という訳でもないだろうが、空気が、雰囲気あまりにも寂れ、廃れている。まるでこの場所だけ世界から隔絶されているような気さえ、させてしまう。

当然と言うのも憚れるが人ひとりいないし、外灯も申し訳ない程度にちらほらと灯っているぐらいしかない。しかもその一部は明滅しており、市がきちんと管理していない、という事を浮き彫りにしてしまっていた。

ここは忘れられた土地なのか、と梶谷喜助は顔を顰めた。曲りにも地方都市を名乗っているS市が、駅近くの地域の一部をここまで杜撰な扱いにする理由がおおよそ見当たらない。

ただ、それぐらいには、この場所は本当に寂れているのだ。数年前にあった、マイホームブーム。そして、今流行りつつあるマンションブーム。今のご時世を考えると、現在両者はイーブン、と言ったところだ。どちらにも一長一短、どちらか自分の好きな方を選ぶ、というのが主流だ。どちらにせよ、その流れの証として、住まいという名の建物が自然と建ち並ぶのは明白である。

しかし、喜助が通る住宅街に、それらの気配がまるでしない。どれもこれも、八十年代に建てられた古い家々が立ち並んでいるようにしか見えない。耐震性に疑問を持たざる得ない住宅もある上、トタンの家も数件見受けられた。これで地方都市を謳っているのだから、なんとも不思議な気持ちにさせられた。

外灯の明かりだけでは心もとないのか、喜助は携帯をおもむろに開き、それを前にかざした。それだけでも、明かりの足しにはなるが、如何せん光量が足りない。生憎と懐中電灯を忘れてしまい、喜助はその携帯のディスプレイの明かりが消えないよう、適当にキーを押す事で明かりを維持するしかなかった。

それでも、道を進むのは手探りに近いものがあつた。先に進むにつれ、外灯は少なくなっていく、最終的になくなってしまった。

携帯の拙い明かりでは、かろうじて細く曲がりくねった道路が確認出来るぐらいで、ちょっと気を許すと塀にぶつかるか、溝に片足を突っ込んでしまう。最後の買い物として、服や靴を買ったのに、台無しにする訳にはいかない。彼は、慎重に歩を進めた。

喜助には、振り返れば人並み以上の経歴がある。ただ、それが今になって何の意味があるのか……当時、その過去は未来を輝かしいものにする다고信じていたが、実際はその逆だった。

過去が輝かしくても、今は惨めでしかない。それが幸いして、鍛え上げた体は七十九歳になっても大きな不自由を彼に与える事はなかった。しかし、目的もなく生きていくというのは、この年齢だと流石に堪える。これからの事を考えると、尚の事。

そう、生きる為にやっているのだ。喜助は自分にそう言い聞かせ、遅々とだが確実に歩を進めた。

今回、彼がこんな日付が変わりそうな時間帯に、そして来たこともない寂れた住宅街にわざわざ赴いているのには、勿論理由がある。それは、ある人物の所在の確認である。定年退職をするまでは警察という身分だったにも関わらず、今では探偵ごっこに興じる老人である。喜助は自分の事を鼻で笑うしかない。

事の発端は三時間前だ。警官時代に知り合った“自称”探偵である人物から、山崎速雄と呼ばれる人物の所在の確認及び、相手の説得をお願いされたのだ。

お願いと言われてしまえば文字通りのそれであり、金銭が関わる事はないのだろうが、実際には、あとでお金を支払われそうな気がする、と彼は思っていた。当然、この程度の事でお金を貰うつもりはない。また一悶着が起きる事は目に見えて明らかだが、喜助はその一線を譲る気はない。

お金を稼ぐ事は無意味じゃないし、無駄な事でもない。生きていく為には必要な事で、働く事は恥ではないのだ。

しかし、今の喜助にとって、お金は二の次だった。もう、お金も今後の生活で不必要になってしまうからだ。本来、不必要と断言するのは間違っているのだろう。しかし、喜助にとって今何よりも重要なのは、生きている証だった。

そう。自分がどのような形を残して生きていくのか。生の証をどこまで作る事が出来るのか。今は、ただそれだけを追い求めていた。

別に、彼は病を患っている訳ではない。八十に届く年齢にも関わらず、健康そのものである。恐らく、彼の警察時代がそうさせたのだろう、と彼は勝手に考えている。今でも量こそ減ったものの、トレーニングも欠かしていない。

ならば、彼はそこまで急ぐ必要など、ある筈がなかった。高齢者の寿命は年々伸びていく傾向にあるし、今後喜助も余程な事をしない限り、悠々自適な第二の人生を送れている筈なのである。

しかしどうだ。八十に手の届く老人は、結果的に深夜徘徊をしている形になり、探偵ごっこをやっている。なんとも歪な形だった。それが生きがいならまだいい。しかし、彼は生きがいを求める為にそれをやっているのだから。……そしてそれは喜助が探す、山崎速雄も同様のだろう。

彼も、喜助と同じように八十に差し掛かる高齢者である、という話を聞いていた。つまり、梶谷喜助と山崎速雄は同い年である。だからこそ、話題も近くなり、相手の説得もしやすいのでは、と“自称”探偵様は考えている……そう喜助は推測した。ただ、面識はないものの、そういう事にはならないだろう、と彼は端から会話を諦めている。同い年だから会話が弾む、というのは安直な考えだろう。

むしろ、面倒な事になりかねない、それぐらいは覚悟していた方がいい。喜助は面持ちを改めて、上を見上げる。暗闇の道を歩き続けた結果、一つの広場に辿り着いた。時間帯が時間帯なのでよく分からないが、その場所は、市の管理する公園のようだった。公園の名前は分からなかった。どこにそれが表記されているか、分からなかったからだ。

それよりも、彼は目の前にある電柱に表記されていた住所を携帯のディスプレイを当てながら確認する。その後、携帯のメモ機能を確認。一致する、ここだ。

「これでハズレだったら、どうするんだろうなあ」

誰もいない中、喜助はそう独りごちる。先程までは暗闇の中を歩かなくてはいけない、という緊張感もあったが、彼は結構な頻度で独り言を言う人間である。自宅に一人だけとなると、テレビ画面ぐらいしか話し相手がないのだ。しかも、一方通行でしかないのだから、会話のキャッチボールすら成立しない。いや、だからこそ独り言を言わなくてははいけないのだ。

「さてっと、山崎速雄さんはホントにいるのかなあ？」

鼻息混じりの冗談交じりで、公園に足を踏み入れる。当然と言えば当然——本当は当然ではないのだが、この公園にも外灯らしき外灯は灯っていなかった。ただ、今までの道のりを考えると、それが当たり前だと思ってしまう。

おかげで、喜助は改めて携帯のディスプレイの明かりにお世話になる事になる。ここまで面倒な場所なら、懐中電灯を持ってくればよかった、と愚痴るも後の祭りである。公園の遊具で足を引っ掛けて転んだ、となったら大事である。それ以上に“自称”探偵様に笑われるのは恥ずかしい。先程よりも、慎重に歩を進める。

「とはいえ、ここは何もないのかね？ 公園じゃなかったのか？」

しかし、その慎重さは無駄だったのでは、と喜助は思わざるを得ない。言葉通り、歩きながら足元を確認するものの、何かしらの遊具があるような感じが一切しないのだ。勿論、周りは真っ暗闇なのだから、彼の見落としもあるだろう。しかし、この公園が公園として機能しているのかどうかを疑える部分があるのは、紛れもない事実であった。

利用者がいないと、公園だって寂れてしまう。ここが地方都市とはいえ、人気のない裏道の公園など、好き好んで利用する人は少ないだろう。ここ一帯は、そのように放逐された場所なのだ。

「しかし、なんだってこんなところを根城にするんだ。他にも便利いい所があるだろうに」

そうぼやきながら、携帯のディスプレイをかざして左右に振って、何かあるのかを確認した矢先だった。一つだけ、ぽつんと公園の遊具らしきものが、彼の視界に映った気がしたのだ。

やっぱりこの公園にも一つぐらい遊具があるのか、と考えるのもありなのだろうが、喜助はそう思えなかった。むしろ、それは目的地に近いそれだろう、と直感的に判断した。

彼は、携帯のディスプレイを、まるで標準を合わせるようにしてその遊具らしきものに当て、ゆっくり歩く。最早、足元など気にしていられなかった。その無遠慮な歩き方は、今まで転倒する可能性を考えて行動した老人とは、とてもではないが思えない。

当然ながら夜の公園が怖い、遊具すらも不気味に見えるなどという発想は、彼にはない。それ以上に、人間の方が何倍も怖い事を承知している。その無機物に対して恐怖を抱くならば、それに意志がある時だけである。

だからこそ、喜助は途中で足を止めた。折り畳み式の携帯を閉じ、ポケットの中に忍ばせる。そして、自身の存在がばれない様に息を殺した。

ここまで長時間暗闇の中にいれば、携帯の明かりだけではなく、なんとなくではあるが、目視も出来る。最初、その輪郭からドーム型の遊具なのかと思った。しかし、違う。近づくにつれて、その正体が明らかになった。テントだ。ドーム型のテントが、そこに設営されていたのだ。

中には山崎速雄がいる。喜助はそう考えた。この時間帯で、わざわざ外に出る事はないだろう。だからこそ、彼は慎重になるのだ。

そう、人間は怖い。その無機物の中に人がいるならば、恐怖を抱くのも、また自然な事なのだから。

おそらく、それは登山用などで使用されるテントの形であり、用途が用途である以上、住居スペースなどまともにあるとは思えない。事実、喜助が横になって、多少スペースがあるかないか、程度の大きさにしかなかった。

それと、当然ながらテントはポリエステル生地なのだろうが、中からの明かりが一切確認できない。こんな時間帯に明かりをつける事は珍しいだろうが、睡眠時に一切明かりを付けないような人物なのか。あるいは、喜助の考えが外れて、山崎速雄はここにはいない、という事もありうる。

「……もしもし？ 山崎さんですか？ 深夜に悪いが、ちょいといいですかね？」

喜助は少し躊躇したのち、中にいるだろうと思われる山崎速雄に声を掛ける。そのついでに、テントの生地を指で弾く。パンパンッ、と小気味いい音がする。きちんとテントを張っているな、と思いながらも反応があるまで続ける。テントには、家でいう扉をロックする行為が出来ない。だから、それは彼にとって、テント内にいるだろう人物に対する流儀だったのかもしれない。

「……なんですか、いきなり」

しかし中にいる人物からすれば、それは余計な事でしかなく、そもそもこんな時間帯に訪問する事自体があまり褒められたことではないのだ。

テントの中から出て来た人物は寝ぼけ眼ではあるものの、あからさまに不機嫌を呈していた。

しかし、喜助は怯むことなくしゃがみ込み、テントの中から出て来た人物と顔の高さを合わせる。元々警察の人間である以上、地で高圧的な雰囲気が出てしまので、初対面の相手には頭をこちらから下げるよう、気を使っている。

「すみません、わたしはこういうものです。あなた、山崎速雄さんですか？」

「ああ、そうだが。すまん、暗いし目も悪いからよく分からん。少し待ってもらえんか」

「はい、構いませんよ」

喜助は自身が着ている、だぼつくコートの内ポケットから名刺箱を取り出し、その一枚をおもむろに真正面にいる老人に渡した。この暗闇の中で名刺箱を取り出すのはなかなか面倒で、渡した際、表と裏を間違えてしまったかも、なんてズレた心配をしたが、相手は特に気にする事もなく受け取った。

しかし、言っていたようにそれが何なのか、分かっていないようだった。山崎速雄はテントの中へと頭を引っ込め、テントの中でゴソゴソと物音を立てて何かをしているようだった。

その間、喜助はどうすべきなのかを考える。本来の目的は、山崎速雄の所在の確認だ。そういう意味では、既に目的は達せられた。あとは踵を返して、さっさと帰ってしまえばいい。勿論、常識も何もあったものじゃないが、ありえない選択肢ではない。

ただ、彼は山崎速雄が公園でテント生活を送っている経緯も聞かされていた。だからこそ、その目的とは別の事をしなくてはいけない、そう考えていた。そしてそれは“自称”探偵も期待している事なのだろう。理由は先の通りである。

喜助も自覚しているものの、山崎速雄と対話など可能なのだろうか？ 彼を説き伏せる自信がまるでなかった。

そんな事を考えている内にテントの中が僅かながら明るくなる。恐らく、懐中電灯かランプかを付けたのだろう。そうして今度は山崎速雄が這うようにしてテントの中から出てくる。

そうすると、山崎速雄が高齢者の平均以上にはガタイが大きく、喜助は思わず感嘆の声を上げてしまう。テント内の明かりで辛うじて彼の姿を確認出来るが、本当に傘寿を迎える人間には見えない。十歳は言い過ぎだが、六、七歳程は若く見える。明るい時間帯であるなら、本当に十歳は若く見えるのかもしれない。

しかし、山崎速雄の表情は喜助のそれに比べてまったく緩んでいなかった。むしろ、対照的に引き締めていた、と言っても過言ではないだろう。そう、山崎速雄は喜助が来た事で不快感を露わにしていた。訪れる時間帯もそうだが、何より彼が何故ここに来たのか、その理由が分かったからである。

「あんた、まさか……せがれから言われてやって来たのか」

「せがれ、ですか？ まあ、ええ、そうです。あなたの息子さんから――」

「帰ってくれ！ 目障りだ！ あのクソボンクラに伝えろ、お前の思い通りにいかないってな！」

そう言って山崎速雄は、先ほど手渡した名刺を二つ折りにして、そこを境に引きちぎって捨てた。その大げさな動きから、相当に腹を立てている事が容易に分かった。

名刺は、相手に自分に関する情報を最も簡潔に、そして確実に伝えるものであり、その当人の氏名と身分を明らかにするものだ。それによって喜助という人物のそれらが初めて他人に認められる事になる。そして、それを破る、捨てるという行為は相手の否定に繋がる。

山崎速雄は認めていない。梶谷喜助の来訪を、認めていない。これは大方予想していたものの、喜助からすれば幸先の良くない展開である。彼は山崎速雄の言葉に負けないよう、しかし慎重に口を開いた。

「まあまあ、落ち着きなさいな山崎さん。こんな夜に騒いだら近所迷惑ですよ」

「お前がこんな時間に来るのが悪いんじゃないか！」

ただ、その慎重さも失敗してしまえば何の意味もない。結果的に山崎速雄を激昂させるような形になり、喜助は半歩後ろに下がる。暴力に訴えるならそれに対抗するつもりではあるが、それまでは下手に出るつもりでいた。暴力では、何の解決も見出す事が出来ないからだ。

しかし、ここ数年間、人とのコミュニケーションをあまりとっていない喜助にとって、会話術など無きに等しい。だから彼は対話なんて出来ないだろうと思っていたし、説得できないと最初から分かっていた。それでも帰らないのは、単なる意地でしかない。

「とにかく、帰ってくれ！ 探偵だが何だか知らんが、二度とここに来るんじゃないか！」

「しかし、私があなただけを見つける事が出来なかったら、息子さんは警察に捜索願を出すと書いています。それは流石に……」

家出人捜索願に出すだけなら簡単である。しかし、世間体というのものもある。彼の家族からすれば、顔から火が出る程恥ずかしい思いをする筈だ。それを彼は理解出来ていない筈がない。それでも家出をしているという事は、そんな世間の目などに対して無頓着なのか、それ以上に家に居る事が苦痛だったか。あるいは、それ以外の何か、なのだろう。どちらにしろ、彼に聞かないと分からない事だった。

「別にいいだろう、あんたは俺を見つけている。あとはお前らが二度とここに現れなきゃいい。何の問題がある」

「そういう問題じゃないでしょう。帰る家があるのに何故、山崎さんは家を飛び出したのですか」

「言わなくても分かるだろうが。お前は俺を馬鹿にしているのか」

取りつく島もない。会話らしい会話が成立せず、喜助の質問と、山崎速雄の否定の繰り返しが続く。それでも、ああ、成程と喜助は少しずつ納得していく。決して言葉のやり取りが成立している訳ではない。それでも、少しずつ、理解していく。

人の言葉は音の羅列ではない。その一つに感情があり、理由があり、想いがある。例え、支離滅裂な言葉でも感覚として、その人の考えが理解出来る時に似ている。

山崎速雄は声を荒ぶらせ、思い通りにはいかない、あのドラ息子が、ふざけやがって、と終始繰り返していた。まるで喜助を怒りの捌け口にするように、もう何もしゃべっていない彼にそれをぶちまける。

高齢者……特に八十を迎える前には、このような高齢者の家出が頻発する。特に自分の子どもと同居している家庭が顕著である。その数は年々増加傾向にあり、一種の社会問題と化していた。そして、その中の多くは高齢ながらも、まだ自立生活を送れる人達ばかりである。

山崎速雄もその内の一人であった。だからこそ、彼は噛みつくように喜助に食って掛かるのだ。

「おい、てめえ、いい加減にしろよ。お前だって似たようなもんだろ。あんた何歳だ」

一人でしゃべくり倒していた山崎速雄だったが、久々に喜助に対する問いが来たので、律儀に返す事にする。

「自分は今、七十九です。あと一週間で傘寿を迎えます」

「なら、あんたも同じだろうが！ あんたは俺達と、違うのか!？」

違わない。そう、喜助は言いたかった。しかし、今それを言うてはいけなかった。それを言ったら、山崎速雄が望むように喜助は彼を見逃してしまうだろう。ただ、それ自体に意味があるかと言えば決してそんな事はなく、単なる自己満足にしかならないのだが。

「違います。ですから、こうしてあなたの所に来ています。お願いします、息子さんの所に戻ってやる事は出来ないでしょうか？」

喜助は、頭を下げた。もう、こうするしかないと思ったからだ。

探偵という職種は、警察みたいな特別な権限が付与されている訳ではない。だから、彼を無理に引っ張る訳にもいかない。確かに彼は公共の場の不法占拠をしている。しかし、それを指摘するつもりはなかった。それは喜助なりの同情だったのかもしれない。

「駄目だ！ 帰る訳にはいかん！ アイツらは俺の事を考えてお前さんを使って探させた訳じゃない！ 戻っても施設に行くよう言われるだけじゃねえか！」

そう語る山崎という老人の表情は、鬼気迫るものがあつた。暗闇でも……いや、暗闇だからこそ分かる、必死の形相。

その先は地獄でもなんでもない。きちんとした生活を送れるし、まっとうな第二の人生を送れる場所だ。昔だったら在り得ない話であろう。過去、老人福祉施設への入所は順序待ちが当たり前で、二年、三年待つことがザラであつた。

しかし、今はどうだ。年齢制限……満八十歳を越えたら手続きのみで、無条件で老人福祉施設へと入所出来るようになった。まったくもって、ファンタジーとしか言いようがない。

昔、課題とされていた老人福祉施設及び、介護士の慢性的な不足。それが解決したら、ご覧の有り様なのである。

一人の老人が、家族から逃げ出す。恐れる。怒り狂う。制度にも問題があるのはあるのだろう。しかし、それ以上に人の心が問題になっているのだ。

利便性を求めるたびに、人は心を虚ろにする。効率を求めれば求める程、人は心を失う。義理とか人情とか、そんなものは便利の良さの前には無力なのである。それは、喜助も痛感していた。

「山崎さんの気持ちは、分かりました」

「……………」

だから、喜助はそれ以上無駄だと判断した。交渉の余地なし、そう結論付けるしかなかった。“自称”探偵のお願い事を叶えてやる事が出来なかったのは残念な話ではあるが、本人がこうも拒否するのであれば、どうしようもない。

あとは、山崎速雄の家族にその判断は委ねられる。少なくとも存命している事は確実に、体が弱っているという感じもさせなかった。それだけでも朗報なのかもしれない。

ただ、喜助が連れ帰れなかったら家出捜索願を出すだろう、という事を言ってしまったので、陽が上る頃までに彼がこの公園に留まっているかは、微妙なところではあるが。

出来る限り、双方が納得する解決法があればいいと思う。ただ、それがあれば、昨今のような問題は多く発生する事もないだろう、という皮肉な部分もある。所詮、梶谷喜助という老人は、それを祈るぐらいの力しか持ち合わせていなかった。

「夜分遅くに申し訳ありませんでした。また機会がありましたら、よろしくお願いします」

そうして踵を返し、喜助は改めてポケットの中になおした携帯を取り出し、そのディスプレイの明かりで地面を確認しつつ、来た道に戻る。

二度と来るんじゃねえ。そんな声が、喜助の背中へやってきた。ただ、彼は振り返る事はしない。振り返っても、同情の気持ちしか沸く事がなかったからだ。

一方、喜助に声を掛けたテントの主は、あまりにもあっさりとした彼の引き際に対して、呆けたようにその背中を眺める事しか出来ない。

一期一介の相手だろう。また機会があれば、など言ったが、今後会う事はないだろう、という事は誰よりも言った本人が分かっている筈だ。

しかし、山崎速雄は先程まで罵声を浴びせた人物のその縮こまった背中を見ると、何故か同情の念が沸いてくるのをはつきりと感じ取っていた。

外灯もロクにない、寂れた住宅街をそのまま北へ直進し続けると、少しずつビジネスホテル、企業の高層ビルなどが立ち並ぶビル街に辿り着く。先程その場所とは打って変って、深夜にも関わらずビルの彼方此方で部屋の明かりが灯っており、結果的に表通りは何もしなくとも明るい。先程まで携帯をライト替わりにしていた喜助からすれば、その手間が省けて気が楽だった。

今までは、なんとか裸眼でも生活出来たが、今後の事を考えて眼鏡を使用しなくてはいけないかもしれない、などと考えながら、彼は懐にしまった携帯を取り出す。ようやく、携帯としての本分が発揮される事になる。

昨今の携帯はよく分からない。それが喜助の率直な感想だった。まだパソコンはインターネットの起動は可能だが、携帯の小さなボタンでアレコレするのは、どうにも慣れなかった。

恐らく、相性なのだろうと喜助は勝手に考える。誰にでもあるだろう、得手不得手というもの。それが彼にとっての携帯だった、という話だけである。

だから、携帯が普及した時から彼は携帯を手にした事などなかったし、息子夫婦に散々言われて、しぶしぶ購入した。当時携帯を欲しがっていた息子夫婦の一人娘が、ここぞとばかりに喜助の携帯を色々と弄っていたのも、いい思い出なのかもしれない。

電話帳に入っているのは十件にも満たない。ただ、その電話帳の開き方が分からないので、高齢者向きの携帯として、それにある大きな三つのボタンの内、一つをプッシュする。

あらかじめ設定しておけば、それを押すだけで相手へ電話が繋がる仕組みらしい。喜助は、せめて携帯電話に受話器があって欲しいと思う。電源と同じボタンである通話ボタンをどのタイミングで押したらいいのか分からないから、携帯電話が嫌いなのだ。

こんな深夜に電話を掛けていいものか、と気になるところではあるが、喜助は別段気にする様子もない。相手は、先程対面した山崎速雄の所在確認をしてくれ、とお願いしてきた人間だからだ。

コールは一回。それだけで、相手の様子があからさまに分かってしまい、喜助はぐもった声で、堪えるように笑った。

電話を取るような音が聞こえてから、少し環境音が混じったのち、受話口から蛙が喉を潰したような声が聞こえてきた。

『はいはい、もしもし。樋口と申しますがどちらさんでしょうか』

「分かって言っていますか？ 樋口さん」

喜助は自宅への帰路を進みながら、苦笑にも似た笑みを綻ぼせる。こんな時間帯に電話を掛けてくる人間なんて、彼以外にいない。この電話だって、今か今かと待ちかまえて取ったに違いないのだ。コール一回で電話を取ったのが良い証拠である。

『いやっはっはっは、梶谷さん、アンタにはよう世話になっているなあ。俺あ、こんな相棒を持ってて幸せだよ』

電話先の主、樋口秀吉は相変わらず蛙が鳴いているのか、人が笑っているのかよく分からない声で笑い声を上げる。

彼は、喜助を山崎速雄とコンタクトを取らせた探偵である。山崎速雄の息子が秀吉に創作の依頼をし、その確認を喜助にお願いしたのである。喜助はまるで助手扱いなのだが、彼自身さほど気にしていないので、それならそれで構わないのかもしれない。

秀吉との付き合いは、随分前に遡る。探偵法業が施行される前だ。今もそうだが、探偵と名乗り法外な請求をする者、実際に調査を行っていないにも関わらず、料金の請求をする探偵が数多くいた。

彼はその類の詐欺探偵ではなかったものの、知人から法外だ、という話を受け、当時血の気が盛んな喜助は実際に彼の事務所に乗り込んだのだった。

その時を思い出すと、喜助は非常に気恥ずかしくなってしまう。当時、テレビで熱血刑事ドラマが流行っていたのも、彼をそうさせた要因なのかもしれない。紆余曲折あった後、その知人の思い過ごしという事で片が付いた。

実際のところ、思い過ごしというのにも語弊がある。単純に、その知人が探偵に依頼する際の金額の知識がなかっただけの話だった。

探偵に依頼するにも金額はピンからキリで、明確に明示できるものではない。詐欺探偵が横行する中、喜助の知人がそう言い出した事も、仕方のないところがあるのだ。

とりあえず、その件に関しては解決した。ただその後、秀吉の方が喜助に積極的に絡んできたのだ。

喜助が当時警察官だった、というのもあるのだろう。探偵も過当競争にあり、少しでも自分に有利になるようにしたかったのだ。そして、彼が定年退職した後も関係は続き、今に至っている。

「幸せに思ってくれる事は、ありがたいんですがね。生憎と期待に応える事は出来ませんよ」
『と、言うത്？』

先程までの蛙の声が、ドスの聞いた、低音スピーカーで鳴らしたような声へと変化する。それは秀吉の冗談が冗談でなくなり、真剣そのものだ、という事を意味している。どちらも、子どもに好かれるような声ではない。もう少し愛嬌のある声でしゃべる事は出来ないのだろうか、と喜助は感想を抱くが、それを忘れるようにして本題へ入る。

「山崎速雄の所在は確認しました。場所は秀吉さんが言っていたのでビンゴ。ただ、彼に帰るよう説得しましたが駄目でした。私じゃどうにもならないですね」

『ああ、そうか。んー、喜助さんだったら説得できると思ったけど、無理だったか』

割とあっさり返答される。なんというか、残念がるような感じではない。彼も大して自分に期待してはいなかっただろう、と喜助は漠然と考える。

「どの口が言いますか。もう、私のしゃべり相手は秀吉さんぐらいしかいないんです。喋る事に慣れてるとは、とてもじゃないが言えませんね」

だからこそ、少し嫌味を含めて喜助は言い返したつもりだった。ただ、その嫌味は自分の自尊心を傷つけるので、自分で自分の首を絞めている変な感覚に陥ってしまうのだが。

しかし、その後の電話先の主の声が途絶えてしまう。何事かと思った数秒後、受話口のスピーカーが震える。

『あー、そうだな。すまん、俺のミスだった。考えが足りなかったな。許してくれ』

喜助のその言葉は、思った以上の効果があったようだ。しかし、戸惑ってしまうのはむしろ、彼自身である。どうして、そこまで謝られるのだろうか、と受話口先の相手に対して小首を傾げてしまう。

人選ミスというのはともかく、そこまで謝られるような事でもない。そもそも、秀吉はちょっとやそっとじゃ謝るような人間ではない。年の功は必ずしもいい方向の力になるとは限らない。小意地になって、自分の考えを曲げない人間も数多くいる。彼は、その内の一人なのだ。

「……それで結局のところ、彼の息子さんにはなんと説明を？」

『そりゃ、起きた事を正直に話すさ。喜助さんが言った事は嘘偽りだったりするのかい？』

「まさか」

『だろう？ あちらさんだって、自分の親父を呼び戻せるなんて期待、最初からしてなかっただろうし。気にする事はないさ』

……どういう事なのか。喜助がしてきたのは、山崎速雄の所在の確認と、彼に自宅へ帰る様に説得する事だ。ただ、当初から疑問に抱いていた事はある。

探偵は有り体に言えば調査業務であり、所在の確認はともかく、直接対象者にコンタクトを取るなどありえないのである。その時点で既に、探偵業として逸脱しているとしか言えない。

『要するに、建前だよ』

秀吉が喋り出す。

『自分は父親が失踪して、けれどきちんと探していますよっていう建前。それでも、いきなり警察に相談する度胸もなく、こっちに依頼したって事だ。大体、失踪したとか言っても、本当に直ぐに見つけられたら？ 知っていたのさ。失踪したとか言いながら、身近なところにいるっていうのが。本当、嫌な時代になったな。年寄り是用無し扱いだ』

多分、父親を探し回っている、何て事を周囲に言いふらしているだろう、と彼は締めくくり一端間を置いた後、息を吐く声が聞えた。恐らく、煙草を吸ったのだろう。

……年寄りは、用無し。その言葉に、喜助は左手でこめかみを抑えた。不愉快であると同時に、それが現状を支配しているこの国の雰囲気だった。

無条件で老人福祉施設へと入所出来るようになってしまってから、何か色々と様変わりしたような気もする。

そもそも、高齢者の定義は六十五歳以上の人を指す。2007年に高齢化率二十一パーセントを越え、この国は世界一の高齢化社会とされた。勿論、歳月が積み重なるごとに、その高齢者の人口は増加の一途を辿った。

年金の受領可能な年齢が満八十五歳にならないと受け取れず、働く事を余儀なくされる人々。100年安心という言葉も幻想に終わり、最早制度自体が崩壊に近い形になっていた。

高齢者による軽犯罪も年を追うごとに増えていき、社会問題として深刻化していた。

彼らが尊敬されていた、というのは昔の話だ。彼らが地位を確立していたのは、何よりもその社会の経験と知識、そして何より全体の高齢者の割合が少なかったからだ。

近代初期まで医療が発展していなかった事も合わせ、長生きする人々は希少だった。その上で経験知識が豊富であり、次の世代を担う若者達にそれを伝える事が出来るのは、彼らしかいなかった。周りから信頼を得るには成程、納得出来るものだった。

しかし、やはりそれは過去の話なのである。今では医療が発達し高齢者の割合が増加、子どもよりも比率が多い中、彼らに希少という言葉は似つかわしくないものになってしまった。

さらに、時代が進むことによって、知識や技術の向上、更にはそれを伝達する環境も整い、歳を重ねているから知識や技術が豊富、という考えが根こそぎひっくり返ってしまった。

今では若輩者でも年上の人間よりも知識や技術に長け、彼らの面目も潰れつつある。

よく最近の若者は生意気だ、と彼らは口にする。それは誰でもどの時代でも耳にする言葉ではあるが、その度合いが強くなっている。年齢を重ねるだけでは、誰も付いてこない時代なのだ。

高齢者の価値が、なくなっている。無機質な言い方をすれば、それが一番しっくりくる言葉であった。逆に、高齢者としてのデメリットが否応にも浮き上がってくるのだ。

説明するまでもない。身体的能力の低下や、知能の低下、高齢になればなるほど体にガタがくる。介護が必要な人々もいるだろう。

今、その介護について、大きな焦点が当てられているのである。

介護という言葉は、ひらがな三文字漢字二文字で説明するのは簡単だ。しかし、その意味は、あまりにも重い。

介護は家族から外部化され、その介護者は家族以外の他人に委ね、対価を支払う介護の社会化が進んでいった。過去、家族の介護は家族が行うのが当たり前、と風潮が変わったと言える。

しかし、その頃から家族が介護者を施設に追いやる、という流れがなかったかと言うと、それは分からない。それを一番介護される本人が一番感じている事だろう。

勿論、それは見当違いともいえるだろうし、各々家庭の事情が大きく関わってくるだろう。それでも、冷たく、端的に感情を切り捨てて見てしまえば、そう見えてしまう部分もある、のが現実だった。

それは、実際に介護施設に行き来する人間にしかわからない。そこに入居される人々が、どれだけ我が家を恋しく思っているのか。そうではないのに、そう思えてしまうのだ。

しかし当時は施設不足、何より改正介護保険法以降、介護の社会化から再家族化という流れになり、介護の社会化とは逆行する形になった。

それに合わせこの国の超高齢化社会では、過去にあまり声の出なかった、介護の家族化の問題が浮き彫りになっていく。

核家族化の増加。核家族とはすなわち、夫婦とその子や、夫婦のみと言った家族構成である。両親と別れ、独立し、自分の家族が出来て生活を行う中で、その両親の介護は至難の業である。

しかし、この国の核家族の割合は六割で、その半数以上は両親の介護を背負う事になる。国全体としては、サービスとして介護の社会化を目指していたものの、その敷居の高さ故、抜本的な問題解決には繋がらなかった。今思えば、それはまさに介護の末期だったのかもしれない。

「秀吉さんは、どう思います？ その、年寄りは無用扱いって話」

『俺か？ はっ、まあ、そうさなあ。自分も大概でいい歳だが、まだ若いモンには負けんよ』
秀吉のその言葉は力強いと言うのは勿論、根性論も入っているのだろう。喜助もその気骨を分けてもらいたいぐらいである。

『ところで喜助さん。まだ家に帰りついていないのかい？』

「……ええ、今まさに帰宅途中ですが」

実のところ、通話していたので立ち止まっていたのだが、そこはいちいち説明せず、喜助は帰っている旨だけを伝える。

『今どこに喜助さんはいるんですかね？』

「えっと、もうすぐS市の中央駅に着きます。そこでタクシーを拾って帰るつもりでしたが」
時間が時間だけに徒歩で帰るよりタクシーを使った方がいい、と考えていた。単純に歩くのが疲れた、というのも間違いなくあるのだが。

『それなら喜助さん、その駅前でちょっと待っていてくれませんかね。奢りますからちよいと一杯飲みに行きましょう』

「こんな時間に？ いくらなんでも時間が時間ですよ。奥さんが困るでしょうに」

『ああ、良いつて。ウチの家内もノリノリだから』

それを聞いて、喜助はつい含み笑いをしてしまう。樋口秀吉の家内である、樋口佐代子の性格を考えれば、納得の言葉であった。むしろ、その誘いは彼女の一声だったのかもしれない。

『元々、今日喜助さんの仕事が終わったら誘うつもりでしたわ。今回は割り勘とか言わない、全部俺が奢るから安心して下さいな』

「いえ、それには及びませんよ」

恐らく、喜助が仕事の報酬を受け取らないだろう、と分かっている言っているのだろう。勿論彼自身もそれに気付いているから断るのだが、相手の方が一歩強引だった。

『そんな事言わんで、いいつて。じゃあ、今からそっち行くから、ちゃんと待っていてくださいよ、ね？』

喜助がその場から逃げ出すとでも思っているのか。秀吉は彼をあやすように言いながら、バタバタと何やら騒がしい音が受話口から聞こえる。

喜助は暫く耳を済ませ、また何か言ってくるのだろうか、と思っていたが、それは唐突に無骨な電子音に変わった。プー、プー、と通話が切れた音が鳴り、彼は携帯を懐へとしまう。

とにかく、このまま飲み屋に行く流れになったのは間違いない。喜助は勿論、その約束を反故して家に帰るつもりはない。

しかし、このまま宙ぶらりんで立ちっ放しなのは落ち着かないし、何より歩き続けた喜助にとって、少し辛い。いくら体を鍛えているからと言って、自分の歳はきちんと考慮しているつもりである。

この場所が駅前である以上、バスの停留所が必ずある。彼は、自分の足を休める為に、そちらへと自然と足を向けるのだった。

帰ってからの予定は、特にない。深夜帯というのものもあるかもしれないが、秀吉に何か頼まれ事をされた時以外は、家に居るのが常である。

勿論、昔ながらの習慣で筋トレは欠かしていないが、それこそ習慣になっているので、特別何かをしている、と言われれば決してそうではないのだ。

つまるところ、梶谷喜助という人物は本当の意味では何もしていない人間なのだ。

自分で大した目標もなく。何かをしなくてはいけないという強迫観念もなく、義務もなく、理由もなく。

いい歳なのだから何もしない隠居生活だっていいではないか。そう割り切れるならば、どれだけ楽なのだろう。喜助はため息をつく。

人は何かをしなくては腐って死んでしまう。彼はそう考えている。勿論それは寿命という名の死ではなく、精神的な意味で言っている。

だから、彼は生きる為に秀吉の頼み事を引き受ける。自分に目標がないのだから、他人の目標に縋り付くしかない。それが良いとは思えないが、これからの事を考えると心を折られそうで、そうせざるを得ない……彼は考えているのである。

生きる意味を失った老人に、一体何の価値を見いだせるのか……そんなの、ある訳がないではないか。

だから、こうやって施設送りまでの時が着々と迫ってきているのに、平凡な事しか出来ない。

生きている理由を見つけたい。生きている証を見つけたい。でも、そうするにはもう、遅すぎる気もする。

別に、施設に行くことが、人生の終わりではない。むしろ、そこからがある意味第二……第三の人生の幕開けともいえる。

老後を、誰かに介護される世代。しかし、そこに自分の意思が果たしてあるのだろうか。そんな恐怖も、間違いなくあるのだ。

「あと、少し……」

喜助はバスの停留所にあるベンチに腰掛け、そう、ため息をつくように呟いた。

彼に自由の時間はあまりに残されていない。既に半年前から職員が定期的にやってきて、施設への入居の手続きを全て済ませてしまっているからだ。勿論、拒否する事は出来たのかもしれない。しかし、それはどうしても無理なのだ。

「私は、どうしたらいいのだろうか」

その言葉は、彼の全てを代弁し、しかし誰に聞こえる事もなく、消えていくのであった。

老人の朝は、早い。それは、梶谷喜助も例外ではなかった。

この歳にもなると、脳の機能というのは本人の身体的能力とはまた別の所で低下していくものである。それは、睡眠でも同じことが言える。

脳の覚醒と睡眠、そのどちらにも脳の機能というのは深く関わってくるのだ。

覚醒……つまり起きている時間も短くなる。そして、睡眠も睡眠で、深い睡眠を取るのが難しく、結果的に目を覚ます。その悪循環が、高齢者の早寝早起きの正体なのである。

まだ、飲み明かしてから三時間も経過していない筈だ。酒は自重して一杯しか飲んでいない為、特に気分が悪いなどという感じはしなかった。

しかし、この気怠さは如何ともしがたい。単純な睡眠不足と合わせ、覚醒不足……その二つに悩まされながらも、布団からゆっくりと這うようにして起き上がり、大きな欠伸をする。

時刻は、六時十五分。普段よりは遅い方だが、この国の人間の平均起床時間よりは早い。普段なら、喜助はもう一時間早かったりする。

時間は違うものの、行動は同じだ。まず、ふらつく足でこけない様に廊下を歩き向かうは洗面所ではなく台所。

そこに祭られている神棚のお供え物の取り換え、榊の水の入れ替えから、彼の生活は始まる。

決して新道に対して思い入れがある訳でもないのだが、幼少の頃から両親がやっていたのを見てきたせいか、これをしないと落ち着かない。とはいえ、無神論者ともいえない彼が信じるものは一体何なのか……それは、彼自身も分かっていない。

ともあれ、それが終わって彼はようやく洗面所に赴く。そこで洗顔歯磨きを行って、また台所に舞い戻る。

昔、彼は料理など出来なかった。職種柄というのも変な話なのだが、コンビニ弁当やカップ麺など、およそ体に良いとは言えない食事ばかりをとっていた。妻と籍を置いた後は、愛妻弁当なるものを食べた経験もあるものの、その時も、自身は料理を作れなかった。

しかし、今となってはお手ものである。確かに、手間のかかり過ぎる料理となると無知識によりどうにもならないが、一般的な家庭料理となれば、レパトリーもそれなりにある。

朝は、睡眠不足も手伝い体の調子もおもんかんばって、目玉焼きと味噌汁ご飯とおおよそ想像出来るであろう、朝食のメニュー。

それをゆっくりと平らげ、身支度を整えた後に玄関の扉を開け、外出したのが午前八時。普段よりやはり一時間遅れているが、さほど問題にはならないので喜助は大して慌てる事もなく、歩を進める。

それは、ある目的地へと向かい外出であるのだが、トレーニングの一環として喜助はウォーキングでそこへ向かっている。勿論、本来の目的とそれは別物である。

その目的地に向かう交通基盤のインフラは十分に整っているので、徒歩で向かう必要はないのかもしれない。しかし、出来るだけ今の体力を維持したい、という喜助の考えは、それらを遠ざけさせたのだ。

その後、歩く事二時間。最初は住宅街、次は国道に出て外食チェーン店がひしめき合う場所に出て最終的には道路が長々と続き、周囲に建物も何もない荒れた地が一変を支配する。

その環境内において、道路は綺麗に整備されている。いずれ、ここの荒れた地も国が既に取り取って、いずれこの辺りも拡張されるのだろう、喜助は勝手に考えている。

そうして歩き続けた結果、たどり着くのは一つの施設だった。否、一つというのもおかしい。その大規模な国のプロジェクトはそんな表現では説明が出来ない。

「あと六日と少しで、ここで暮らす事になるのか」

その真っ新で大きな施設を……しかも、広大な土地に大きなゆとりを持って建設された建物達の大半は、住居区。おおよそ、今後拡張される土地を合わせて、それだけで一つの市町としての大きさに匹敵するであろう膨大さ。

――すなわち、八十歳以上の高齢者が無条件で住む事が出来る、老人福祉施設。それが、彼が向かう目的地だった。

全国の都道府県に設置されており、彼が辿り着いた施設も、その一つである。

道路が横に逸れて地下にある駐車場に向かう道があるが、喜助はそれを無視して、真正面の施設入口の事務棟に入る。

ここは、人の出入りをきちんと管理している。面会などの施設の訪問の際、簡単な手続きとはいえ、きちんとここを通過しなければならない。

過去にあった普通一般の福祉施設だって、自分の親に面会する為に名前の記入位されるものであるし、ここまで大規模になってしまうと、それ以上に窮屈になるのはある程度仕方のない事だった。

受付窓口は十五、ないし二十に近い。県に在住している八十以上の高齢者がここに集められているのだ。当然、この場にいる人間の数も多い。……ただ、それでも。施設内で暮らしている人達と比較しても、この一室にいる人間の数は、どう見ても釣り合っていない事は一目瞭然なのではあるが。

「おはようございます、梶谷さんですね。毎日お疲れ様です」

入館手続きとして列に並び、五分程したところでようやく喜助の番が回ってきた。

受付嬢をしているのは、最早顔なじみの人物だった。

「すまないね。いつもこんな格好で」

喜助が少しバツの悪そうな声で苦笑いをするのだが、彼女は屈託のない笑みで笑い返すのだった。

今の喜助の姿はウォーキングの為にジャージを着ている状態である。入館する人間で、そのような服装のまま来るのは今の所彼ぐらいのものだろう。喜助のその姿は、その部屋の中で十分な異彩を放っていた。

「いえ、最初は大変な人とは思いましたが、今では慣れましたので」

しかし、悪気はないとはいえ、口は些か悪い。喜助はそれに対して特に何かを言う事などはしなかったが、毒があるなあと言った。

彼女の名前は佐藤佳子。喜助の孫娘の先輩にあたる。彼女と面識したのはもっと前ではあるものの、そういう関係にあると知ったのは喜助と、息子夫婦と一緒に見舞いに来たのがきっかけだった。

孫娘とはいえ、もう今年で十八歳。今が進路で悩む時期である。学校の先輩なのか、或いは塾などの先輩なのかは分からないものの二人はそういう関係であり、佐藤佳子は既にここを就職場所として、働いているのである。

「それでは、こちらにお名前と住所をお願いします」

佐藤佳子から記入用紙を受け取り、喜助はそれに書き込む。既に慣れたもので、書きながらも彼女に尋ねたい事があったので、それを聞いた。

「美代子から何か連絡とかあったりしますか？」

「いえ、特にありませんよ。最近は連絡を取り合うような事もしてないんですよ」

「ありや、それはどうして？」

「うーん、別にそんな大した意味はないですよ、何か悩み事とか愚痴とかあれば、その時に聞きますし、あっちが連絡してくるでしょう？ だから、何にもないんだろなあって」

喜助は、書き終わった後の用紙を佐藤佳子に渡す。その後、彼女から首掛けのプレートを渡される。彼には縁がないものであったが、それはまるで会社等で使われる社員証みたいな印象を与えた。

しかし、昨今の先輩後輩の関係も随分と変わってきているような気がする、というのが喜助の印象だった。昔はもっと、先輩から後輩に絡んできたものだし、彼もそうされ、そうしてきた。

時代の流れと言うのか、基本的にプライベートな事まで触れずに不干涉、という雰囲気があり、彼女はまさにその代表なのだろう。

やもすれば冷たい、という言い方もされるのだろうが、生憎と喜助はそういう時代の前に労働から解放された身だ。まだその実感がわからない、と言うのが本音だった。

「それでは、ごゆっくり」

椅子に座ったまま、綺麗にお辞儀をする佐藤佳子。さっきとはうって変わって他人行儀らしい態度だった。こういうメリハリが大切なのかね、と彼は内心複雑な気持ちで目礼し、入ってきた入り口とはちょうど反対側にある出口へと向かう。

押し扉を一気に押して、その光景を喜助は眺めた。まったく、此処の外は未だ更地だと言うのに、ここはまた別世界である。

そう、景色が一変していた。均等に並ぶ建物に、道路以外の場所では芝生が青々と茂っている。土地の開発段階から植えられた木は、立派な若木へと成長していた。これも、年齢を重ねるごとにどんどん大きくなっていくのだろう。

ここの住人の殆どが高齢者であり、労働者の殆どは介護に従事している人々だ。またこの施設内にもきちんしたスーパーや雑貨店があつたりするのだが、それでも先の二つの割合からすれば微々たるものだ。

ここでは基本的に車の通行は禁止されている。一応、ゴルフカートのような軽車などがあつたりするが、それもあまり見かける事はない。

その大半は、車は車でも車椅子であるのが現状であり、またそれありきの構造になっているのだと理解するのに、彼がここに通うようになってから少し経過した後だ。

通る道々、起伏がない。坂がなければ山もない。山もなければ谷もない。常に平坦。それはここで暮らす高齢者の為配慮であろう事は一目瞭然だった。リハビリならまだしも、移動に大きな負担を掛ける訳にはいかない。よくよく考えればその通りで、それは喜助にもよく理解出来た。

ここに住む人達にとって、それはありがたい事だろう。そして、それに限らず様々な方法と手段によって万全な介護と生活が保障されているこの地は、高齢者にとって理想の老後生活を送れる場所なのだろう。

だが、その一方で悪い部分も見えてしまうのも、また致し方ない部分もある。

そう、まるで、高齢者をここの場所に押し込めて閉じ込める印象を与えるという事。実際、隣の県の知事の『箱庭発言』も物議を醸しており、この国は年寄りを邪魔者扱いし、追い出しているのではないか、という論調も確かにある。

事実、各政党でも『高齢者の解放』を謳い、年金の復活を公約に立候補する人間もいる以上、全てにおいて受け入れられている訳ではない、という事は明らかである。

市民団体もたまにデモ行進を行い、この施設の即時撤廃を求めるものの、果たしてどれだけの効果があるのか。

そういうしている内に、喜助は目的の棟に辿り着く。要介護認定4、ないし5の人達が生活している棟である。要介護認定という呼び方は昔の名残であり、本来は介護保険制度における、市町村が被保険者に介護が必要である状態であると認定する基準だった。

ただ、今では単なる介護の必要な度合、という意味になってしまっている。それはすなわち、昔にあった要介護認定という制度は、今この世に存在しないのだ。

それだけではない。昔あった、ありとあらゆる高齢者に対する保障は、満八十歳以上の人間を施設に入所させる事が出来る。これで全て一括りにしてしまった。

その高齢者の世話をする必要もなく、お金も掛らない。余計な労働をしなくても済むし、心身とも疲弊する事がない。悩む必要がない。それだけで、家族は自分の祖母を、祖父を、父を、母をそこへ簡単に送り込む事が出来るのだ。

けれど、その送り込まれるところは例外なく介護、介助が付くし、彼らにとっても不便らしい不便な生活を送る事はない。その点を考えてみれば、なるほど理想の制度だった。

……勿論、彼ら本人の意思に関わらず。

「……妙子。今日も、来たよ」

真っ白な建物に、真っ白な廊下。まるで清潔感を押し付けるようにして逆に眩しく感じる中、彼はエレベーターで三階へ上がり、その部屋に来た。

丁度、巡回の時間ではなかったのか、介護士の姿は見られなかった。普段なら会うのだから……と思い、喜助はハツとする。そう言えば、自分は一時間遅れて来てしまったのだと。

「ごめんなあ、昨日っていうか今日、色々あって遅くなってしまったよ」

喜助はその部屋にあったパイプ椅子を引っ張って、ベッドの横に腰掛ける。

しかし、ベッドで体を寝かされているその人は、何も言わない。何も答えない。ただ、ぼんやりと天井を見つめるだけである。

だから、喜助は……会話をそこそこでやめてしまう。キャッチボールが出来ないのなら、一人で壁に向かって言葉を投げるしかない。でも、隣に人がいて。妻がいて。いるのに一人で壁に向かって投げるだなんて、惨めったらありやしない。

ここ近年で、自分がまともに話した事のある相手は、誰だろう。樋口一家に、入り口にいた佐藤佳子ぐらいか。喜助は悲しく思う。その中に、家族が誰一人入っていない事に。

妻に色んなことを伝えたい、色んなことを教えたい。今日はこんな事が。明日はこうだといね。一生懸命話し掛けた時期も、勿論あった。

でも、何も変わらなかった。喜助も、話し掛けるのを止めた。ただ、時間だけが過ぎていく。その場に居てやる事しか、彼にはもう何もする事がなかった。でも、居るだけなのだから、彼はやっぱり何もしていなかった。

彼女は、今生きたいと願っているのだろうか。死にたいと思っているのだろうか。今を幸せだと感じているのだろうか。今は不幸だと知っているのだろうか。

答えは否だ。それを不幸だと知っているのは、何よりも喜助自身でしかない。

ただ生きているだけで幸せだと人は言う。しかし、喜助はそれを嘘だと思っている。ただ生きているだけじゃ、人は幸せにはなれないし、幸せではない。それは、彼女がまざまざと見せつけてくるから。

「あら、おはようございます。今日は遅かったですね」

その時、部屋の扉がスライドして、白衣を纏った年配の女性介護士が入ってきた。年配と言っても、喜助からすればまったく若いのだが。

恐らく、普通に巡回でやってきたのだろう。喜助は普段通り、しゃべる気にもなれず頭を下げるだけだった。

要介護認定4以上は日常生活全般において介助が必要になってくる。しかも、意思の伝達も困難な場合があり、定期的に見て回らないといけない。

何かあっても、それを伝える事が出来ないのなら、第三者が見るしかない。それが、喜助の妻の要介護のレベルであった。

そこには、彼女の意思がないも同然……そんな生に、何の意味があるのか。喜助には、分からない。

でも、生きていて欲しいと思う気持ちは当然ある。半生を共した妻に死んで欲しいと願う夫で在りたくない。

しかし介護士に介助される姿を見ながら、喜助は思わずにはいられなかった。

もし死にたいと言うのなら、いっそ私が殺してあげよう、と。

彼のそんな願いすらも届く事なく、ベッドで横たわっている女性は相も変わらず天井を見つめ続けるだけだった。

「……秀吉さん、大丈夫ですか？」

「……ああ、喜助、さんか……大丈夫大丈夫……」

そう言って、パタパタと手を振る樋口秀吉だが、その言葉にどれほどの説得力があるというのか。喜助は疑うまでもなく、当てにならない言葉だと確信する。

喜助が老人養護施設を出て、二時間半。やってきたところは秀吉が探偵として営んでいる樋口探偵事務所である。

ただ、事務所というのも変な話で、自宅一階の子ども部屋を改装してそれらしい場所になっているものの、如何せん空間が狭すぎた。

探偵事務所？ あれが？ ただの物置じゃないのですか？ 過去、喜助が秀吉の探偵事務所までの道案内をした時の、その人の言葉が蘇る。一応、二つの窓に小さく樋口探偵事務所、とビニールテープの文字を書いているものの、まさかそれが本当に探偵事務所だと思う人間が、どれだけいるのか。

まだ、子どもの秘密基地だとか、探偵ごっこで遊んでいるかの二つに一つだと言われた方が納得出来てしまう。今も子どもの中で探偵ごっこが流行ったりしているのかは、分かりかねるところではあるが。

ただ、昔は別の所に事務所はあったし、秀吉もあの過剰競争の中よく生き延びた方なのだろう、と言うのが喜助の評価だ。勿論、運も働いただろう。しかしそれ以上にこんな歳まで探偵業を営んでいるのは彼の気合いと根性が常人より数段高かったからに違いなかった。

しかし今となつては、道楽みたいなものだろう。探偵を公的に認める制度などないのだから、それこそ自由奔放に出来ると言つてしまえば、確かに出来る。ただ若干、喜助に近い年齢の彼が探偵なんて業務を行えるのか。その疑問は尽きないだろう。少なくとも彼の今の姿を見て頷ける人は絶対にいないだろう。

「まったく、なんで喜助さんはそんなに平気なんだい。俺あ、二日酔いでどうにもならないのに……」

ソファにぐったりとして、背もたれに背中を付けることなく首裏に掛け、そのまま体を滑り落ちるようにして座っている様を見て、誰もが休日にダラダラするオヤジを連想するだろう。秀吉の姿はまさにそれで、喜助は少し笑いを越えらえるのが必死だった。

「さっきと言っている事が全然違いますよ、秀吉さん。さっきの大丈夫と言つたばかりなのに」
どうして、喜助と秀吉では歳の差がそこそこあるのに、喜助の方が若く見えて秀吉の方が年寄りに見えてしまうのだろう。それはきっと、日々の生活の習慣の賜物だと彼らの生活の差を見れば分かる筈だ。

秀吉は中年太りがずっと尾を引いたままでこの歳になつても、若干、肥満体系に近い体をしている。腹はポッコリ出ているし、痩せ型の喜助に比べればそれは明らかである。

しかし、そんなのが比較にならない人が、ソファでぐったりしている秀吉に声を掛ける。

「ほら、アンタ。そんなところでだらしない格好していんじゃないわよっ！」

その人は秀吉に遠慮などしない。そこをどけ、と言わんばかりに掃除機の吸い込み口をソファへ……もとい、秀吉に押し付けようとする。

「お、お前、な、何俺に向かって掃除機向けていんだ……」

おっかなびっくり、それでも秀吉は夫の威厳としてそう口にするが、掃除機を持つ人間にとって、それは些細な抵抗にしかならない。さながら、子どもが親に悪い事をしたにも拘らず、苦し紛れに言い訳をしているそれだ。

「そんなの知らないよ。その薄い髪を吸い取られたくなかったら、さっさとどきな！」

秀吉以上にドスの効いた声で旦那を脅す彼女は、樋口佐代子……昨日、喜助を飲み屋へ誘った張本人である。

恰幅のある体格で、秀吉以上の肥満体型である。高齢者も時代の流れと共に肥満と診断される人達は年々増加傾向にはある。しかし、彼女は七十代を折り返す返さない辺りの年齢の割には、その影響による病気も心配されかねないほどの体格なのである。

おおよそで、喜助よりも身長は十センチ高く、そしてそれ以上に横幅が凄い。大げさだが秀吉より倍近くあるのではないかと、言った具合だ。

顔も月日によって比例する皺も、たるんだ肉によって変にパンパンと張っている。傍目見たところで、喜助と五歳近く年齢が離れているとは誰も信じないだろう。佐代子は、その外見だけで高く見積もっても六十前半にしか見えないだろう。

「相も変わらず、尻に敷かれていますね」

「や、止めてくれよ喜助さん……佐代子、頼むから他の人がいる時ぐらい……」

「ハイハイ、分かったからどいてどいて。木偶の坊じゃないんだから、掃除の邪魔！」

そう彼女に一喝されて、彼はしぶしぶその場を空ける。酔っぱらってしようがいまいが、彼女に逆らえないところは変わらないらしい。

逆に、彼女はイライラしているかのように、ソファの上を掃除機でかける。とはいえ、そのやり方は非常に乱雑でゴミを吸い取っているのは甚だ疑問である。そもそも、秀吉が座っていたソファは革製なので掃除機でゴミを吸うより布で拭き上げた方が綺麗になるのだが、夫にそんな追及をする度胸などある訳がなかった。

「喜助さん、あっち行こう、あっち」

秀吉はおっかなびっくり、妻の癩癩に触れないように事務所の奥の部屋へ手招きをする。確かに狭い上に彼女がいたら更に狭苦しく感じてしまう。話をするどころではないのは考えるまでもない。喜助は頷き、彼の後をついて行く事にした。

「アンタ、梶谷さんにちゃんとお茶とか用意しておきなよ！」

「分かった、分かったから」

二日酔いには頭が響くのか、秀吉は右手で頭を押さえながら、声のトーンを落とせと左手を上下させるが、彼女にその意思が伝わらなかったのか、更に何かもの言ってくるので、彼は逃げ出すようにして事務所を後にする。

そんな仲睦まじい様子を見て喜助は一笑いした後、秀吉の後を追いかける。ただ、追いかけると言っても家の中であるし、喜助はこの家へ何度もお邪魔した事があるので、彼を追いかけるというより、向かうべき場所を知っているからそちらへ向かっている、というのが正しい。

事務所を抜けたところは、ごく普通の家庭で見られる廊下になっている。ただ、事務所の床はコンクリート床で土足でも問題なかったのだが、ここからはフローリングだ。丁度そのまま上がらない様に段差になっているので、喜助はここで靴を脱いでそのまま真っ直ぐ歩く。まさしく勝手知ったる他人の家である。

「喜助さん、どうぞどうぞ。座ってください」

突き当りを右に曲がったリビングに入ると、テーブルに湯呑を置いて、お茶の準備をしていた。喜助は気にしなくていいですよ、と言うものの、彼はそういう訳にもいかないから、と言って、準備を進めていく。

喜助の言葉より、妻の言葉の方がよっぽど重いのだろう。二日酔いで大変だというのに、お疲れ様。彼はそう心の中で同情の意を示し、リビング用の椅子に腰かける。

今日の深夜から明け方にかけて飲み屋で飲みに行った際、喜助も酒に関しては沢山進められた。しかし、器用巧みに飲んだふりをして秀吉のような醜態を晒さずに済んだ。

今頃掃除をしている佐代子は素面のようにしか見えないが、事実そうなのだろう。喜助のように嘘呑みをしていた訳でもなく、本当に酒を飲み干して酔っている様子が見られないのだから、体質的な問題なのかもしれない。

しかし、決して肝臓によいとは思えないその飲みっぷりは、未だ喜助は忘れることが出来ないでいた。それほどインパクトの大きいものだったのだ。早死にしそうな感じをさせない事もないが、あの手の人間ほど長生きするんだ、と彼は今までの人生経験感で、そう思っていたりしている。

「いやはや、見苦しいものを見せましたな」

お湯は最初から沸いていたのか、それとも既に急須にお湯が入っていたのか。台所に向かった割には直ぐに舞い戻ってきた秀吉は、テーブルに置かれた湯呑みに緑茶を注ぐ。

「酔いの方は大丈夫なんですか？ 無理しなくて横になっていてもいいんですよ？」

「いやいや。気持ちはありがたいんだけど、女房がいるから。二日酔いより怖いからアレ。言う事聞かなかつたらフライパン飛んでくるから、命懸けなんだ」

一体どこまで本気でどこまで冗談なのだろうか。喜助には分からないが、秀吉の言うそれが誇張表現である事を祈るしかない。

「……それより。山崎速雄の件についてなんですが」

「え？ ……うん、ああ。それがどうかしたかい？」

昨日、喜助が出会った山崎速雄と言う老人。彼は、梶谷喜助とどこまでも共通点を持つ人間だった。

精々、彼との違いは実行に移したか、移していないかの違いだけ。その移す行為自体が誰かに迷惑を掛ける事だと分かっている、それをする度胸など喜助にはなかった。

「その、どうなると思いますか？」

だから、彼はそんな事を聞いてしまう。もう、この件に関しての喜助の出番は終わっている。山崎速雄と会話を少ししただけでそれ以上の接点などない。

秀吉の言う事が本当なら、山崎速雄の家族は彼をそのまま放逐する可能性もあるし、仮に家族が彼をきちんと見つけて家に引きずって行っても直ぐに施設行きである。

「さあなあ。依頼を受けた時から正直おかしいとは思っていた。居場所を突き止めたらそのまま説得してくれ、なんて言いやがる。おかげで機材とか殆ど使わなかった。調査料も多分、今までの中で一番少額になる筈だぜ。本当に、大した事はしていないんだ」

秀吉がやったのは、聞き込みだけである。しかも、僅か数時間足らずでその消息が確認出来た。だからこそ、そのまま駆け足のように喜助に連絡を入れて現地に向かわせたのだ。

それがどれだけ異常なのか……説明されなくとも、喜助には十分理解出来てしまう。

「昨日、家族の建前って話はしたよな。多分、それで間違いはないんだよ。彼の不幸は、その歳まで生きていたのか、それとも家族に恵まれなかったのか、それは分からない……っと、悪い」

「いえ、構いませんよ秀吉さん。私の所も、似たような事情です」

本当にその通りだった。山崎速雄と梶谷喜助は、そういう意味では似たもの同士。互いに年齢を重ね、家族関係に軋轢がある環境。そこからどうにかしようと思って逃げ出したのが前者で、もうどうにもならないと考えて諦めているのが後者なのだ。

「……まだ、息子さんと喧嘩しているんですかい？」

「ええ。息子は、すぐにでも私の財産が欲しいみたいですね。施設に行けば、基本的にお金なんていりませんから」

「毎回聞くたびに酷い話だと思うね、本当」

そう、この制度が始まってから、何かと色々問題が発生している。その中でも顕著なのが、家族間の問題だ。

八十歳以上は例外なく施設へと入所出来る。それだけなら家族の負担が減っていいではないか、という話になるのだが、人の心はそう単純なものではない。むしろ、人間の醜い部分が露呈していく様を見せつける結果となってしまった。

「まったく、秀吉さんの言う通りなんですよ。年寄り是用無し扱い。それは実の子だろうが変わらない。育てた恩なんてある訳がない。情けないもんです」

施設に入れるという話。別段、強制的な訳ではない。きちんと申請すれば従来通りの生活は出来る……最も、年金生活なんてものは過去のもので収入を得る事の出来る人でない限り、施設へ入所するのが常ではある。まだ、これだけならいい。

しかし、一人でも多く……家族が、その年寄りにこのまま一緒に暮らそうと言わないのが問題になっているのである。

「確かに、やむ得ない事情もあると思います。介護が大変な家庭もあるでしょう、生活が大変な家庭もあるでしょう。けど、そうじゃない家庭も沢山いる筈なんです。ある筈なんです。でも、皆同じように、当たり前のように送り出すんですよ」

いってらっしゃい。施設の方にいってらっしゃい。気が楽になるからいってらっしゃい。居ても困るからいってらっしゃい。邪魔だからいってらっしゃい。

施設にいる人間の分、様々な『いってらっしゃい』があっただろう。勿論、口でそんな事を言う事はない。しかし、喜助には分かるのだ。家族は、年寄りを何処かに放り込みたいのだと。

「……………俺は子どもに恵まれなかったけど、なんだかそっち方がよかったって思えちゃうよなあ。それは、決して不幸ではないけど、必ずしも幸福でもない筈なんだ。嫁さんがいるけど子どもが出来ないって時は、そりゃあショックだった。二人して泣いた。なんでウチには、と思った。養子を迎えようとも思った。……でも、今はしなくてよかったと思っている。そう考える自分が少しだけ、嫌になる」

二日酔いの影響なのか、喜助に感化されたのか。秀吉も彼らしい本音を吐露する。今のこの世界のこの国は、家庭の繋がりがあまりにも浅いのだ。

自分達が利するよりも損失が大きいならば、あっさりと切り捨てる。年寄りの老後を近くで見守る労力があるならば、それを自分自身に費やす。それがこの国の現状。施設の反対を訴える人達が出てくるのも、なるほど納得するものである。

義理と人情なんて感情は、ビジネスと政治だけに使われる言葉であって、国民に忘れ去られた存在なのだ。彼らは義理や人情の前にまず利益と不利益を天秤に掛ける。そして、前者だったら選びとり、後者だったら打ち捨てる。今までも確かにそうだったが、とうとうそれが身内の人間にまで関わってしまえば、それは大きな問題となる筈である。

「俺達、死ぬ時に幸せだって思いながら死ぬことが出来るのかねえ……」

「……正直、自信はありませんね」

「俺もだよ。いけないって考えているけど、嫁さんより早死にしたい気持ちもある。誰かに看取られて死にたいよなあ」

結果良ければ全て良し、という言葉があるように。最後が不幸だったら、自分は不幸な人生を送ったとしか思えない。逆に、今までずっと不幸でも、その間際が幸せだったら、きっと幸せな人生だったと思えるだろう。

しかし、そんな幸せな死に方が、今は期待できない。そう分かってしまう事が、どれだけ不幸な事なのだろうか。二人には嫌でも分かかってしまって押し黙ってしまうのだった。

「……まったく、大の大人が何をぐちぐち言っているのやら」

しかし、そんな雰囲気をもるでなかったかのように破壊しながらドスドスと足を踏み締めるように佐代子がリビングに入ってくる。掃除機を片づけに来たのだろうか、軽々と片手でそれを持ち上げている。ちなみに、巷でよく言われている小型化とは無縁の、十年前以上に購入した掃除機なので、決して軽いわけではない。

「梶谷さん、色々悩んでいる様だけどそう言うのあんまり意味ないと思うわ。自分の人生は自分の自由に生きなきゃね」

「……ごもつともです」

ただ、その言葉は辛辣だ。残酷だ。あまりにも胸に響きすぎる。そしてそれが分かったのか、秀吉がまあ待てよ、と佐代子を宥めるが、彼女は止まらなかった。

「息子さんの事はともかくとして、梶谷さんには奥さんがいるじゃない。今よりずっと一緒にいてあげられる。それでいいじゃない」

「そうなんです。そうなんですよね……」

ただ、あの真っ白な天井を見つめてばかりの妻の姿が頭をよぎる。彼女を彼女としてずっと死ぬまで見続ける事が出来るのだろうか。そんな不安も彼にはある。

既に会話する事を諦めた旦那である。もうその時点で喜助は、単に妻だからという理由でしか毎日施設に行ってみ舞いに来ているだけなのではないだろうか。妻という存在に束縛されているだけなのでは、という恐ろしい考え方をしそうで嫌になる。

考えれば考える程袋小路に嵌まっていくような錯覚……しかしそれは彼自身が追い込まれている証拠に他ならない。

退いても地獄、進んでも地獄。そんな心境である。どちらを選んでも、すぐに問題は起きないだろう。しかし、ボロは必ず出る。いずれ、施設に行かずとも息子辺りが財産をせびり、彼を施設に送り出そうと躍起になるだろう。施設に行けば、いずれ妻と真正面から向き合わなくてははいけなくなるだろう。

喜助は心境的に進退窮まる状態にあるのだ。それを理解出来る人間は本人以外に存在する訳でもない。だから、究極のところ、彼は独りぼっちでしかない――

「それか、世捨て人になるっていうのはどう？」

そんな彼の心の内を悟ったのか悟らなかったのか、佐代子はそんな事を言い、大きな頬をにんまりと笑いながら持ち上げる。

「世捨て、人、ですか……？」

「えっと……佐代子、世捨て人ってなんて意味だったっけ」

世捨て人とは、浮世を捨てて世間との交渉を絶った人を指す。もう少し噛み砕くと、一般的な生活環境を捨てて、人との関わりを断ち、人がいない場所で生きていく事を言う。

しかし、一般的な意識定義はあまりにも曖昧だ。仕事の事情で、家の中で缶詰状態になっていた場合でも世捨て人だという人もいるし、ニートの事を世捨て人と言う人だっている。

何故そんなに曖昧なのかというと、真の意味での世捨て人など、この世に存在しないからである。

確かに俗世から離れ、人との関わりを断ち生きていければ、なるほど、世捨て人と呼ぶに相応しいだろう。

「確かに、そういう生き方が出来れば、素敵でしょうね」

しかし、今の時代でそんな生き方を出来る人間など一人もいない。人一人が身に付ける技術や知識はたかが知れている。そして、その中に一人でも自分自身の力のみで生き抜く事が出来る人はいない。そのような教育を受けてないし実践もしたことがないからだ。

勿論、そういう意味で佐代子が言っているのではない事ぐらい、喜助も分かっている。

「素敵かどうかは分からないけど、そういう選択肢もあるんじゃないかって話よ。逃げる事が卑怯だという人もいるけど、私はそうは思わない。逃げない事を選んで死ぬぐらいなら、逃げた方がマシよ。生憎この歳になって恥を重ねても何とも思わないわ」

あっはっは、と彼女は恰幅の良い体を自分の手で叩きながら豪快に笑う。夫である秀吉は辟易とした表情で頭を押さえる。彼女のトーンがあまりにも高く、やはり二日酔いには辛いようだ。

「世捨て人、か……なかなか、私には難しそうな話です」

聞いただけなら安い、いざそのような生き方を選べと言われても躊躇するのが人間だ。それ以上に、喜助の体はある意味一つではない。もうどうにもならない程修復不能だが、家族の繋がりは確かになる。息子にも、妻にも。

それをずっと守るべきなのかどうかは分からない。しかし、佐代子のその言葉でハイ、分かりました。と素直に答える程簡単な話じゃない。

「ああ、そういえば」

だからこそ、思う。樋口夫妻に聞こえないように、そうポツリと呟いた。

「山崎秀雄も、こんな気持ちだったのかなあ……」

その答えは、自分自身が知っている。けれど、なんだかそれを認めてはいけない気がして……喜助は改めて自分が第二の人生の岐路に立たされている事を、より一層実感するのだった。